活動報告

音楽指導における視覚的イメージ付加について
―短期大学部学生の事例から―

藤　田　光　子

On the Visual Image Addition in Music Instruction
―From a Junior College Student's Example―

Mitsuko FUJITA

【要　　旨】
教育現場や保育現場において音楽を扱う際楽曲の理解は非常に重要である。学生自身がその楽曲について知り、十分に学習する必要がある。その場合、学生は伴奏や歌唱などの練習を行い、まずは演奏できるようになるための練習を行う。それを更に子どもの前で実際に扱う時にはより深い理解が必要となるのである。音として聴覚的に入ってくる刺激、楽譜として視覚的に入ってくる刺激、さらに歌詞内容の理解によって言葉として入ってくる刺激、さらにその言葉が視覚的イメージとして感じ取られる。学生にとって視覚的イメージの付加が楽曲を理解する上で有効な手だての一つではないかと考え、これまでの取り組みからいくつかの事例をあげるものとする。

【キーワード】
音楽　視覚的イメージ　付加　絵　歌詞

1．はじめに

学生が音楽を演奏または伴奏などを行うとき、さまざまな方法で独自に練習などを進めていくが、保育現場や教育現場で音楽的指導を行う場合においても、学生は自分で指導の方法や手順を考え、楽曲の練習をし、準備を行う。

このときおそらく楽譜をみて練習をはじめ、指導書などからの情報を得ていくという段階は普通に行われていると思われる。ここではさらに深く楽曲を理解するための方法として、また自分自身が指導や保育実践を行う立場になったとき十分理解し、音楽的実践を行うことができるようになる手立ての一つとして、視覚的イメージの付加ということを考えていくこととする。楽譜から得ることができる情報としては音符・速度・強弱、フレージングそして歌唱を伴う楽曲の場合は歌詞からの情報も多くある。これらの情報から得られる楽曲の特徴や演奏の仕方、指導の仕方や扱い方を考えたときさらに一歩踏み込んだ方法として視覚的イメージを付加することが音楽的指導や音楽的実践を行うときに有効ではないかと考えている。

その方法として

① 音楽指導する楽曲についての歌詞内容を絵で表すことによる自分教材研究書の作成

② 音楽指導する楽曲についての楽譜に文字や記号を付加することによる自分指導書の作成

③ 保育実践に使用する楽曲を絵や記号を付加することによる自分用楽譜作成

についての取り組みを行った。学生である今深く楽曲を理解する１つの方法として、経験しておくことで今後の音楽指導を行うための何らかの手助けになればと考えている。

また自分の手で作成することが、時間はかかっても楽曲を深く理解するための方法の一つであることも知ってほしいと考えている。

２．イメージ付加について

これまで音楽と絵の表現や音楽を図式で表現するなど多くの研究者や芸術家が音楽を音以外のもので表すことがなされてきた。パウル・クレーの「音楽と絵」ラフマニノフの「音の絵」その他にもカンディンスキーやスクッリャービンなど、多くの芸術家や画家、音楽家が、音楽と絵についての作品を残している。

また楽譜については「楽譜は作品か」「楽譜は音楽か」という問いかけはいつも存在している。一つの考え方として楽譜は作品と言えるかもしれないが、厳密に言えば音を視覚化したものであり、音楽が作品であるとすれば、楽譜自体は作品とは言えない部分もある。

学生が楽譜から学習にはいる場合、楽譜は音を奏でるためのものであり、実際にピアノなどの楽器で音として表現するためのものでもあるため、聴覚的であると同時に音楽記号の配列を見て理解しているとすれば、視覚的であるとも言える。さらに保育者を目指す学生が学ぶ音楽には歌詞が記載されているものが多い。この歌詞についても、言葉としての理解、歌詞に音を載せた音としての理解、そして歌詞内容が示す情景としての視覚理解が考えられる。さまざまな刺激が１つのものから与えられることになる。これらを学生が学ぶ際、有効に自分のものとし、子どもたちに歌い演奏する活動で使用していくとき、１つの刺激として理解していくより複合的な感覚刺激として取り入れていくことが、より印象的に学習できるのではないかと考えている。

視覚的経験はものを学ぶ際重要なポイントとなる。知性は視覚的な経験にとても敏感である。さらに聴覚視覚両方の刺激により視覚のみより２倍にも能率が向上するといわれている[1)]このことからも、音楽を学び活動する際の学習段階として、聴覚視覚両面の刺激を与えることは効果的であると考えられる。

特に視覚的経験は当事者の性格や経験に基づいて操作されることがある[2)]。つまりある歌詞を読んで思い浮かべる情景はその人の経験による情景であり、「ふるさと」と聞いて思い浮かべる場所は当事者のふるさとであり、誰もが同一ではない。しかしそのことが印象をさらに深く植え付けることになる。教科書や指導書に出てくる山や川、花の絵のある故郷は一般的故郷の概念であり、今学習している学生たちが思う故郷は家々が立ち並び、多くの車が走る場所であるかもしれない。そこで幼少期を過ごした学生にとっては、それこそ故郷であり、懐かしいと感じる場所であろう。ただ情景としてはそれぞれが別にもつ場所であるが、思いはどうであろうか。やはり両親がいて、友達がいて、学校があってといういろいろな思いがつまったところそれが故郷であり懐かしいと感じる事ができるのではなかろうか。そこで自分自身が歌詞から受ける視覚的イメージを付加することで、さらに深い楽曲理解につながるのではないかと考え実践した。

音楽は音として認識する。歌も同様に音として認識する場合と、言葉として認識する場合がある。これらを複合して考えたとき、音楽を絵や記号でイメージを付加させることに一つの意義を感じるのである。しかし、保育者や教育者として子どもたちに伝えていくとき、曖昧なイメージだけに頼りそれを伝えていくことはできない。正しい知識、裏付けは必要と言える。

そのためにも楽曲の成り立ち、音楽としての構成、音の配置、その他の情報などあらゆるものを理解し、その上イメージを付加することが重要となる。このイメージを付加する時多くの学生は表現を意識したり、音の出し方を意識したり、伝え方を考えたりというさらに一歩深まった内容として理解していくことができるのである。

目から入る情報というのは私たちにとってはとてもわかりやすい。音楽を絵やその他のものを付加して表す時、絵で表す。色で表す。線や図形で表す。などが考えられる。これらの中から今回は実際に楽曲理解のとき①歌詞から受けた視覚的イメージを絵で表す②歌詞や音楽の構造上理解したものに記号等を加える。③歌詞から受けた視覚的イメージを絵で表したうえで、さらにその他のものを加える。という３点の試みの事例を取り上げる。

これらの取り組みを行った結果、学生たちがどのように感じ、今後の実践に役立つ内容であったかなど、自由記述の感想からその傾向をさぐる。

３．イメージ付加の実践について

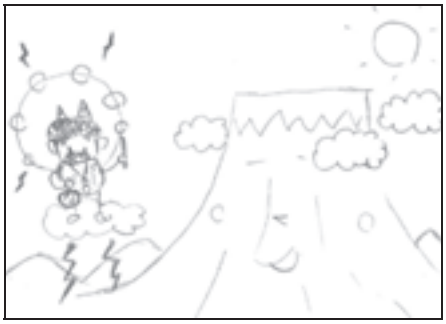
ここでは音楽指導や保育実践のなかで使用される音楽を学生が練習したり指導したりするために必要な教材研究を行う際に作成した楽譜や自分で作った指導書についての2008年～2011年に行った実践から事例をあげる。

実際にすでに市販されている指導書や楽譜などにはない各自が重点と考える部分も見え隠れする取り組みとなった。

（1）絵によるイメージ付加について

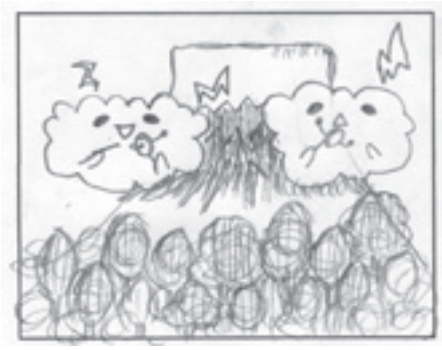
１例は「ふじ山」「こいのぼり」を子どもたちと歌い指導していくときの自分教材研究書作りをおこなった。このときイメージしておくこととして、歌詞をもとに絵を描くこと。歌詞を縦書きにし、漢字表記を加えること。さらに楽譜を写譜し、重要と思われるところ、歌いたい部分などを書き加えることとした。「ふじ山」の指導の際の学生の学習内容としては楽曲を歌えるよう覚えたり、伴奏を演奏したり、この楽曲に関する歴史的内容や背景なども教材研究として行う。しかし子どもたちにわかりやすくということは自身にとってもわかりやすくと考えたときに、この「ふじ山」という楽曲の歌詞から絵で視覚的イメージを付加することがよいのではと考えた。そこで、学生それぞれが考えるふじ山の絵とこの歌詞の内容とを加味した上で絵による表現を試みた。教科書には大きな富士山の写真が載っているが、ここでは写真でダイレクトに入ってくる情報ではなく、歌詞内容を自分で読み砕きながら自分自身で歌詞内容を理解し、表現することでさらに内容に深みが増すと考えた。学生の事例として以下の3点を挙げる。

【学生１】



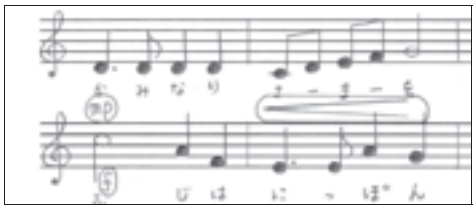
【学生２】

【学生３】



ここでは、「そびえ立つ」「頭に雪の着物きて」「頭を雲の上に出し、」「四方の山をみおろして」という視点と「雷様を下に聞く」という歌詞内容がよく表現されていることがわかる。この中で【学生２】は【楽譜１】を示した。

【楽譜１】



旋律がわかる楽譜を写譜し、気を付けるべき点を記入している。音の強さに関するf、mpなどを書き入れ記号に○印を記入している、さらにクレッシェンドに○印を自分で書き入れている。

【感想から】

これらの取り組みの結果、自由記述で書かれた学生の感想をまとめてみたところ大きく３種類に分ける事ができた。感想内容１はわかりやすいやイメージしやすい、自分で書くのでわかりやすいというような肯定的内容。感想内容２は時間がかかる。指導書を見れば分かるなどの内容。感想内容３は写真も使いたい。合奏や絵描き歌も考えられるなどもっと発展させた内容を考えた内容。

このことから先ず学生にとっては絵として表現することは分かりやすく、イメージしやすいという結果が得られた。時間のかかる取り組みではあるが、絵として表現する時間考える時間も長くなり、歌の歌詞として音表現するだけにとどまらず、視覚的にイメージしやすかったことがうかがえる。また楽譜内における書き込みをあとで見直す時、実際に指導するときにわかりやすいという感想があった。

感想内容１	17
感想内容２	3
感想内容３	5

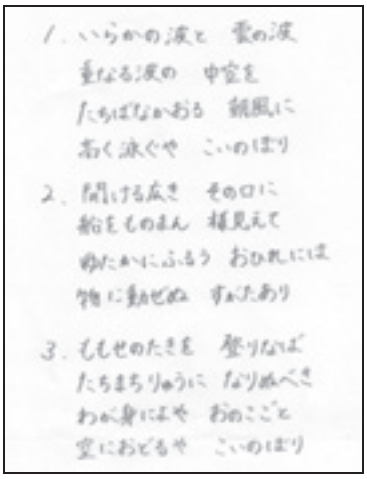
２例目として「こいのぼり」も歌詞を読み歌い、学習したのであるが、前例とおなじように、この楽曲を使用するとき、指導するときにどのような点に注意しながらおこなうか今度は各自で考えてもらい前回は五線や枠などの指示もした上での作成であったが、今回は自由に作成するよう促した。その結果以下のような事例が見られた。【学生１】ではこいのぼりの詳細を絵で表現し、説明を加える。また「甍の波と雲の波」のように歌詞内容とも一致した絵で表現している。【学生２】では色を鮮やかに使った絵を描き、詳しい「こいのぼり」の歌詞内容よりも絵としてのインパクトのほうが大きいものであった。【歌詞】のように縦書きや横書きにして、漢字仮名のまざった歌詞を記載している学生が多かった。写譜した楽譜を入れるなどの工夫をした学生もあったが数は少なく楽譜に対する取り組みについては個人差が見られた。

ここでは２回目ということもあり、形式を設定しなかったためさまざまな物ができあがりそれぞれに工夫されている点は見受けられた。

【学生１】

【学生２】

【歌詞】


1. いらかの波と 雲の波
重なる波の 中空を
たちばなかおる 薫風に
泳ぐ泳ぐや こいのぼり
2. 開ける口は 何を呑む
餌をものかと 様見えて
ゆたかにふるう おひれには
物に動じぬ すがたあり
3. もしもせのたきを 登りなば
たちまちりゅうに なりぬべき
わが身にはや おのごと
空におどるや こいのぼり

【感想から】

前回の「ふじ山」と同様に感想内容が大きく３点に分けられた。感想内容１はイメージしやすいなどの分かりやすいといった内容。感想内容２は時間がかかるや現物を見た方がいいなどの内容。感想内容３は更に発展した内容が考えられるといったものである。感想内容３の中には楽譜に関する取り組みをしなかったが、実際に使用するときに困るのでやはり楽譜については必要とする学生もあった。

感想内容１	16
感想内容２	6
感想内容３	3

他には、「絵をいれればもっとわかりやすかった。」「写譜したほうがよかった」などの実際に作成をしてみた上で楽譜の重要性に気づく学生もあり、繰り返し行うことと自身で考えながら使いやすく作ることまた指導場面を想定して作成する重要性を感じられるものとなった。

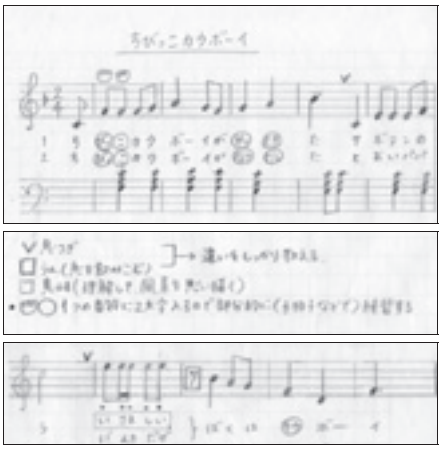
（２）指導書作りから

ここでは、すでに短大での学習を終え専攻科２年に在籍している学生７名による指導書作りを行った。楽曲の指定はせず、学生それぞれが選んだ楽曲を使用して指導書作りを行った。指導書はたくさん出版されており、見れば多くの情報を即座に得て使用することができる。しかしここでは一曲一曲に学生が思いをこめどのように子どもたちに伝えていきたいかということに着目し、自分で指導書を作ることに試みた。

ここではそのなかで「ちびっ子カウボーイ」を選曲した３名の学生の事例を挙げる。

学生にはじめに指導した内容としては、１，指導の際は歌唱の内容であること。２，気を付ける点や手順がわかりやすいようにイメージしやすいよう視覚的に示すということ。この２点を指示し、自分自身で指導する内容を考えたとき自分に分かりやすいように、また他の人が見たときにもわかるようにという指示で、自由に作成に取りかかった。

【学生１】

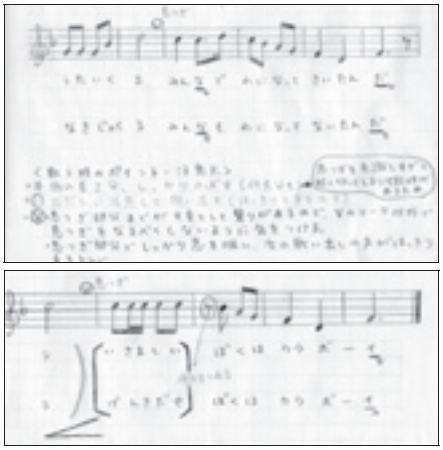


この学生の指導書は、独自の記号による表記がなされていた。拍子とリズムがわかりにくい部分については手拍子マークを付け、さらにその部分が１音に促音を有し２文字入るため歌う際に注意する点であることも、文字に丸印として表記されている。またはっきり歌いたい部分

には四角で歌詞を囲み強調し、リズムが難しく感じられる16分音符と８分休符についても注意点としてあげている。

また授業の際伴奏しやすいように、自分で伴奏付けにも挑戦している。実際に音を出して弾くことはできていたが、それを楽譜化したとき、伴奏譜の休符の記譜や、楽譜の書き方の間違いが見られることなどについては、授業のなかで注意点としてあげ、今後の課題とした。

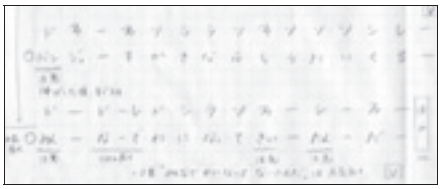
【学生２】



この学生は、息つぎについて重要であると考えていることがうかがえる。歌詞内容を妨げない息つぎを工夫するため特に〈歌うときのポイント〉として欄下に記載している。

また付点のリズムから音が短くなってしまうことを防ぐため特に星印をつけ注意を促している。なめらかに歌う部分と元気に歌う部分を分かりやすくするために（　　）や［　　］で表現している。

【学生３】



この学生は、写譜することをやめ、階名の記載を試みている。実際に楽譜よりも階名のほうが分かりやすいと感じ、音を長く伸ばすところは横棒で記している。また休符についても楽譜上の記号を使用せずに「うん」や休みとして四角で囲む記号にしている。８分音符４分音符、休符分の長さの表記をもう少し工夫すると更に分かりやすいものとなることは今後の課題とした。しかし子どもたちに示すときにも分かりやすいため、板書で扱うような書き方で工夫されているのが分かる。さらに、歌詞については１音に２文字はいる部分について注意点であると考え、丸印を使用している。

【感想から】

ここに示した３名の学生は同じ楽曲を選択しているがそれぞれに自身が考える重要な点、楽譜から分かる歌い方やの注意点などを独自の方法で記載している。視覚的イメージを付加し指導書を作成してみることで、どのように感じたか自由記述で書いてもらった。

その結果、【学生１】は「自分が歌って難しいと感じる場所がはっきりし、その部分を目で見て分かりやすくすることで、指導するときに安心だと思った。手のひらマークは子どもが興味を持ってくれると思う。実際に手拍子を打つときに分かりやすいと思う。」見て分かりやすくする工夫を考えて作成されたことが分かる。【学生２】は「段々できあがってきてもう少しうまくできたところがあったように思う。自分では見て分かりやすい気がしたが、子どもに見せる時はもっと色とか使って工夫できると思う。」実際に作成してみた上での反省もうかがえる。【学生３】の学生は「自分は楽譜が苦手なので、階名にしたが、階名を書くときに楽譜のようなルールをきちんとつくればよかったと後で全体を見て感じた。」階名という楽譜が苦手なものにでも分かりやすく示したが、音の長さの表記など工夫できる点を課題としてあげている。

この感想からも、目で見える形でイメージを付加することは分かりやすいがその方法としてさらに工夫する点や課題が見えてきた。一人一人がイメージ付加を有効的に利用するためにも反復し継続的に行っていく必要性が見えてきた。

（3）自分楽譜作りから

これまでの視覚的イメージ付加の取り組みから保育現場で音楽を使用する際にもこれらの取り組みが効果的ではないかと考えた。

ここでは音楽経験を持つ学生の中から、保育実践に使用したいと考えている楽曲について「こどものうた」などから選曲し、自分自身がその楽曲を学んでいく段階で必要であると感じる楽曲のイメージや演奏上必要なことを付加した自分楽譜を作る取り組みを行った。

保育科の２年生９名それぞれに音楽経験をもち、すでに弾き歌いの授業などを終え単位を取得している学生である。

まずは比較的ピアノが得意で、音楽経験もある学生が、今の段階で保育現場において音楽を使用するとき不安に感じる点を挙げてもらった。

【表１】不安内容

経験年数	不安内容１	不安内容２	不安内容３
約10年	うまく弾けるか	みんなが歌ってくれるか	
２年	うまく弾けるか	うまく導入できるか	声が出るか
約15年	歌いながら弾くのが苦手		
約17年	こどもを見ながら演奏できるか		
３年	実践で弾けるか	子どもが歌っているとき間違えたら	とまってしまわないか
８年	子どもの前でとまらないか	楽器を演奏する場合のまとめ方	選曲
６年	声が負けてしまう		

これを見ると音楽の経験年数にかかわらず、うまく弾けるかという技術的な面の不安が多いことが分かる。また「まとめ方」「子どもを見ながらの演奏」「うまい導入」「選曲」といった子どもたちを前に活動をする際の不安点もあげられている。このことからいわゆる楽器を練習することで補う事ができる面と、それ以外に準備が必要な面とがあることが分かる。そこで不安材料のなかでより良く自分で納得できる音楽使用ができるようにと考えたとき今までの指導事例を踏まえて、自分楽譜づくりが一つの方法として有効ではないかと考えた。

これから保育実践のなかで使用していこうと考えている楽曲について自分楽譜をつくり視覚的イメージを付加する事について提案したうえで学生が選曲した楽曲が以下の内容である。

各自楽曲を絞りこみ１人が１曲分の自分楽譜を作成することに決定した。

〈学生が選曲した楽曲一覧〉

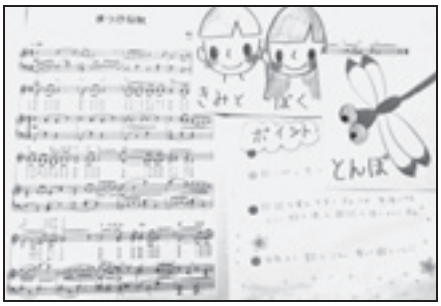
1	虹のむこうに
2	おにのパンツ
3	世界中の子どもたちが
4	虹
5	まっかな秋
6	ふしぎなポケット
7	うたえバンバン
8	コンコンクシャンのうた
9	ドレミのうた

手順としては学生自身がいつも練習を開始するときにどのような手順で練習するかを一人一人が考え、それを参考にしながら楽曲練習に取りかかった。

更に「楽譜をよく読むこと。伴奏が演奏できること。歌詞を理解すること。」また歌詞理解についてはイメージ付加を行うために視覚的要素を組み入れることも指示した。

そのうえで伴奏・歌唱などの練習を始め、演奏上必要なことを自分の楽譜に書きこみ歌詞や絵などさまざまに織り込んだ自分楽譜として１冊のものを作成した。

【学生１】



この学生は楽譜には演奏するときに気を付けることを記入している。絵の描かれたカードを準備し、視覚的にみても楽しさが伝わってくるような歌詞カードを作成している。

【感想と考察】

この取り組みのなかで、効果的であったことは、先ず楽譜をよく読むことができたことである。演奏経験のある学生であり伴奏を練習することは難しいことではなかったが、通常なら通り過ぎてしまいそうな部分についても、立ち止まって考える事ができたのは効果的であったと言える。

学生の感想からは、「いつもの練習よりよく楽譜を読んだ」「歌詞を読んで絵を入れようと思うと、歌詞の内容をよく考えた」など取り組みに関する効果は感じられた。

今回はさらにはそれを使用して、10分～15分案を作成し模擬的に保育場面を実践した。その実践のあと全員で反省をおこない、「子どもを見ながら活動をおこなうこと」や「歌いながら弾く」ことについて改善点を出し合った。自分では気づかない部分や、それでは分かりにくいなどの部分が出されさらに深い内容となった。

4．おわりに

これまでの取り組みでは視覚的イメージを付加することは、学生にとって時間はかかるが楽譜や音楽についてじっくりと考える一つの有効な手だてであることはわかった。

イメージという言葉自体は非常に曖昧な部分も多いが、音楽を記号や文字、絵や色というような違う媒体で表現するそのときにじっくりと楽譜を読んだり、歌詞を読んだりすることは、学生にとっては重要な一つの段階になると感じている。その中でも特に記号や色における印的扱い方が学生には演奏の時分かりやすい面が多いと感じた。それは学生自身が子どもたちに音楽的に伝えていきたい部分の確認に役立つと考えられる。さらに、歌詞理解をする際には、絵でのイメージの付加は有効であり、印象の強さにおいては視覚的に非常に強いと言える。しかしこの絵を描くと言うことは絵を描く力量に左右されると考える学生も多い。実際に描いた絵では、イメージはわかないと感じる学生もあった。絵を描くとき歌詞をよく読み、言葉一つ一つの意味を考えるというプロセスは、イメージ付加においては重要なポイントとなる。描かれた絵をみて他者がどう思うかという点だけではなく、自分が描くための準備をするというところにも意味があると感じている。

また、学生が継続的にこのような学習をすることによって、内容の深まりと自分自身で考える力、自信が備わってくることもうかがえる取り組みとなった。

【引用文献】

1）アルベルト・オリヴェイオ著　川本英明訳　メタ認知的アプローチによる学ぶ技術　2005年　創元社　ｐｐ34,35
2）重野純著　音の世界の心理学　ナカニシヤ出版　2003年　pp160

【参考文献】

1．アルベルト・オリヴェイオ著　川本英明訳　メタ認知的アプローチによる学ぶ技術　創元社　2005年
2．重野純著　音の世界の心理学　2003年 ナカニシヤ出版
3．国安愛子　情動と音楽　音楽と心はいかにして出会うのか　音楽之友社　2005年
4．ウイリアム・ベンゾン　西田美緒子訳　音楽する脳　角川書店　2005年
5．保育所保育指針　平成20年告示　厚生労働省告示第141号　フレーベル社
6．幼稚園教育要領　平成20年告示　文部科学省告示第26号　フレーベル社
7．小学校学習指導要領　解説　文部科学省

【使用楽譜】

「こいのぼり」教育芸術社　小学校第３学年
「ちびっこカウボーイ」教育芸術社　小学校　第４学年
「ふじ山」教育芸術社　小学校第３学年
こどものうた200　小林美実　チャイルド本社
続こどものうた200　小林美実　チャイルド本社